仕事人秘録

未来の予感を形に ⑦

故郷で伝統工芸に着想

工業デザイナー
川崎 和男氏

故郷でデザインの仕事をみつけることは大変だった

1981年の冬、故郷の福井市に戻った。

デザイナーとして独立した後は猛烈な勢いで仕事をした。仕事をしていれば車いす姿の自分を忘れることができた。ただ、もうかる仕事の多くは自分の本来のデザイナーとしての志からかけ離れたものになっていった。福井に戻ることは私自身の原点に返るために必要だった。

81年は世に言う「五六豪雪」で、日本海側はまれに見る大雪に見舞われた。当時の私の妻は私のためを思って福井行きを勧めてくれた。そんな彼女ですら、雪国の想像以上に暗くて厳しい冬にはショックを受けていたようだった。

しかしこの北陸の厳しい風土が幼いころの私を育てたことを思い返した。生まれ育った北陸から新しいデザインの風を巻き起こし、東京へ再び乗り込む。そう考えて自分を奮い立たせるしかなかった。

ところが東京時代に比べると仕事は一気に減った。公共事業に頼る地方の経済は規模も小さく、活力もあまりない。見かねた私の旧友が、地元名産の生ナメコのパッケージデザインの仕事を持ってきてくれるくらいだった。これほどのデザインの仕事しかないのか。そう思うと涙が止まらなかった。

蓄えはだんだん底をついていく。東京から「都落ち」するということはこういうことなのかとかみしめた。そのころの私は、東京にはあるが福井にはないものばかりを意識していたように思う。

東京になくて、福井にしかないものを探し始めた。

産業や消費人口の集積では一地方にすぎない福井が東京にかなうわけがない。だが、福井は東京より歴史のある土地だ。京都の周縁という地の利を生かし、室町時代から受け継がれてきた地場産業の存在を思い出した。越前打刃物や和紙、漆器などだ。こうした伝統工芸にデザインを導入できないかと考えるようになった。

このころ、母校の金沢美術工芸大学名誉教授で漆芸の大家である小松芳光先生と出会う機会があり「漆をデザインしてみたい」と伝えた。先生からは「その前に花鳥風月を見つめ直しなさい」と言われた。つまり古今和歌集や新古今和歌集をしっかり読めということだった。このヒントのおかげで、私は日本美にふさわしいデザインは何であるかを意識するようになった。

福井の伝統工芸品が持つ日本美にデザインを取り入れたいと思い、武生市（現越前市）にあった工業試験場を訪ねた。そこで出会った越前打刃物とその職人たちの姿をみて「東京にはない」と直感。刃物をデザインしたいと持ちかけた。だが職人たちは最初の内は口もきいてくれなかった。デザイナーという私の肩書に不信感を持っていたからだ。

2010年11月16日　日経産業新聞　21面　日経産業新聞社　＜仕事人秘録＞　未来の予感を形に